

初めて好きになった人があなたで、本当に良かった——。

GLASS 1.5

~はじめての恋人~



これは私の人生において
決して忘れられない
大切な思い出となった
ある秋の出来事の話である――





playback



GLASS



——どうして
こうなってしまったのだろうか？

教室の窓辺に腰掛け
沈みゆく夕陽を横目に
私 白川優衣は
今日起こった出来事に
思いを巡らせていた







この日私は
何週間も前から準備していた
ある計画を実行する予定だった

しかしそれは
なんとも些細な理由で
失敗に終わってしまった……



その日
私は体育の授業を
体調が悪いと嘘をつき
欠席をした

人生で初めて綴った恋文を
クラスメートの男の子の机に忍ばせるという
ただそれだけの為に

下駄箱に入れる方法も考えたが
その時はこれが最善のように思えた

しかし
それが最悪の結果へ繋がるとは
思いもよらなかった……





机の中に
手紙を入れようとしたその時
私の目に一冊の本が
飛び込んできた

今思えば
見て見ぬふりをした方が
自分にとつても
幸せな選択だったかもしれない

そこには
挑発的なポーズをとった
全裸の女性が
写し出されていた

年頃の男の子が
こういうモノを見るのは
知識として知っていたし
理解もできた

けれど
それを見た瞬間私は
嫉妬なのかなんなのか
自分でもよく分からない
感情で一杯になってしまった

そして体育が終わると
すぐに彼に詰め寄り
放課後に話があると
呼び出していたのだった





こうして私は
教室の隅でただ一人
彼が来るのを待っているのだった

結局手紙は渡せず
スカートのポケットに
仕舞い込んだままだ

何もかもが思い通りにいかず
気分が落ち込んでくる





待ち合わせの時間を
しっかりと決めなかったのも失敗だった

下校時刻が過ぎた校内からは人の気配が消え
どこか寂しさを感じさせる静寂のせい
不安だけが私の心に募っていく

またいつもみたいに
喧嘩腰になってしまわないだろうか

そもそも
ちゃんと来てくれるのだろうか

学級委員長としての責務から
彼を呼び出したはずなのに
考えることはそんな心配事ばかりだった







ほどなくして
教室のドアが開き
彼が姿を現した

櫻井一志君
——私がラブレターを渡すはずだった人

——私の好きな人





彼の顔を見た瞬間
私の心に安堵の気持ち
広がっていくのが分かった

約束通り来てくれたという
ただそれだけで嬉しかった



しかしその喜びもつかの間
彼の気の抜けたような
キョトンとした顔を見た途端
私の中で何かいけないスイッチが
入ったのが分かった



次の瞬間私の口から出てきたのは
彼を叱責するキツイ言葉の数々だった

ああ
私はいつもこうだ

もっと普通に会話したいと思っっているのに
どうしてこんな言い方しかできないのだろう

本当に自分が嫌になる

ずっとこんな自分を
変えたいと思っっているのに
変わることが出来ない
変わるキツカケすらない





そして
これも痛感する

こんな私が
どうして彼に好かれるというのだろうか

ラブレターを渡して
いい返事が返ってくる理由がない

帰ったら手紙は捨ててしまおう
この気持ちは心の中に
ずっと仕舞ったままにしておこう

頭の隅でそんなことを考えながら
説教を続けていたその時だった――





……あ
そういえばさ
手紙ってなんの手紙？

……私
そんな事言った？

言っただじゃん
手紙入れようとしたって

唐突に発せられた
櫻井君のその一言に
全てが凍りついた

頭の中に“？”が飛び交い
思考が停止する
脳の神経回路が活動を再開するのに
ざっと数秒は必要だった

どうやら説教をしている間に
口を滑らせて
手紙のことを
喋ってしまったらしい







私は必死に頭をフル回転させ
この窮地を乗り越える為の
打開案を模索していった

そして最善と思われる
答えへと辿り着くと
動揺を悟られぬよう胸を張り
声を高らかに宣言した

果たし状よっ!!
私はあなたに決闘を
申し込もうとしていたのよ!
櫻井君勝負よ!!

……もう少しだけ
熟考すべきだった





先に足を崩した方の負け
シンプルでしょ



苦し紛れに言い放った
「果たし状」という言葉
自分でも何を言っているのかと
驚いてしまった

しかし
一度口にしてしまった以上
この馬鹿げた主張を
押し通すしかなかった



その場の思い付きで
正座対決を提案すると
櫻井君は困惑しながらも
受け入れてくれた

こんな無茶なお願いに
付き合ってくれる彼に
申し訳が立たなかったが
今の私にはこうするしか
方法がないのだった

とにかく
ごまかす

たとえ今の私の印象が
最悪になろうとも
彼にこの気持ちを知られる訳にはいかない



やったー！勝ったー！！
私の勝ちよ！！

——いったい
どれぐらい経っただろう

時間としてはそれほど
長くなかったかも知れないが
自分の脚が限界に近付いてきた頃
ようやく櫻井君が痺れに耐え切れずに
床へと倒れ込んだ

それは勝敗が
決したことを意味していた

その瞬間
私はつい全身で
喜びを爆発させてしまった

勝負に勝てた嬉しさよりも
手紙を隠し通せた安心感の方が
大きかったかもしれない







だが
それがまずかった

私も彼と同じく
長時間の正座によって脚が痺れ切っていたせいで
上体を起こしたタイミングでバランスを崩し
横たわる櫻井君の上へと倒れ込んでしまった

その時
どこから紙が落ちたような音が聞こえた気もしたが
それが何なのか確かめる余裕は今の私には無かった





大丈夫？ 委員長？

気付いた時には私の目の前に
櫻井君の心配そうな顔が
広がっていた

瞳の虹彩すら
クツキリ見えるほどの距離で
私を見つめている



これほど近くで彼の目を見るのは
あの時以来かも知れない

そう……
私が初めて櫻井君の事を
異性として意識した
一年前のあの瞬間と……

私はまるで魔法をかけられたかのように
その澄んだ瞳に釘付けになってしまった





だっ……大丈夫よ！

私はその空気を
振り払うように強く言い放つと
慌てて彼の胸から飛び退いた

頬が火を差したように熱を帯び
心臓が恐ろしい程の速さで
早鐘を打っている

恥ずかしさで
彼の顔を直視することが
できなかった



もうこれで手紙の事は
ごまかせたろう……

あとは適当にこの場を
切り上げれば良かったのだが
脚が痺れているせいで
すぐに立ち上がるのは困難だった

今すぐここから
逃げ出したい気持ちを抑えながら
脚をマッサージしていると
不意に櫻井君が私に訊いてきた





……ねえ
これ書いたのって委員長？

振り向いた私の目に
飛び込んできたのは
なにか紙を手に掲げた
櫻井君だった

そこに書かれていた
見覚えのある文章に
視線が吸い込まれる

それはまさしく
私がポケットに仕舞っていたはずの
ラブレターだった

その事実を認識した途端
私の頭は一瞬のうちに
真っ白になってしまった

前略、櫻井一志様。
突然このような手紙を受け取って、さぞ驚かれています。ありがとうございます。
私は同じクラスに在籍する女子生徒です。名前は伏せさせていただきます。
手紙に名前を書かないのは失礼だとわかってはいますが、
私の心には書く勇気がありませんでした。
せめて、これから伝えることの結果次第で、
君と普通に接する事が出来なくなってしまうのが怖かったからです。
志君、私は貴方が好きです。とても好きです。
学んで同じクラスになり、櫻井君と過ごしたこの一年半、
私は自分でも気づかないうちに櫻井君に恋をしていました。
いつも貴方の姿を目で追ひ、家に帰ってから、
お風呂に入る時、夜眠りにつく時、
心頭で浮かんでしまいます。
どうかと迷いましたが、
君を前にするといつも上手く話す事ができませ
くお話をしたいのに、素直になれない自分が
とかこの気持ちを伝えられるかとも思っ
てください。
つあります。
ときな人がいるかどうかで
ら、明日の放課後、
来てくださいます。
したら×と書いて
手紙は必ず
読んで自分
いと思っ
返事



前略、櫻井一志様。

突然このような手紙を受け取って、さぞ驚かれていますかと思いますが、
私は同じクラスに在籍する女子生徒です。名前はお知らせさせてください。
手紙に名前を書かないのは失礼だとわかってはいますが、
の私には書く勇気がありませんでした。
女なら、これから伝えることの結果次第で、
君と普通に接する事が出来なくなってしまうのが怖かったからです。

志君、私は貴方が好きです。とても好きです。
学して同じクラスになり、櫻井君と過ごしたこの一年半、
私は自分でも気づかないうちに櫻井君に惹かれていました。
いつも貴方の姿を目で追ひ、家に帰ってから、
お風呂に入る時、夜眠りにつく時、
かり頭に浮かんでしまいます。

うかと思いましたが、
君を前にするといつも上手く話す事ができませ
くお話したいのに、素直になれない自分が
とかこの気持ちを伝えるかとも思っ
てください。

つあります。
ときな人がいるかどうかで
ら、明日の放課後、
いてください。
したら×と書いて
手はずっと
親って自分
いと思
返事



私は反射的に手紙をひったくると
二度と復元できないくらい
ビリビリに破り捨て
考えるよりも先にこう言い放った

こっこれは違っの！
友達！友達に頼まれたの！
櫻井君に渡してって！

好きな人に好きなことが伝わってしまう恐怖
その人から拒絶されてしまうのではないかという不安

そんな思いから
私はなりふり構わず
差出人であることを否定してしまった



しかし櫻井君は
そんな慌てふためく私の様子を
微笑みを浮かべて
じっと見つめているままだった

ああ……もうダメだ
彼に私の気持ちバレてしまった

すべてを察し
諦めようとしたその時だった

んじやさ委員長
その友達に伝えといってくれる？
質問の答え
好きな子がいるかってヤツ

私の事を
気遣ってくれたのか
櫻井君が私の嘘に
話を合わせてくれた



思ってもみなかった展開に
心が浮足立つ

私が手紙に書いたのは
「好きな子がいなければ
私のこの気持ちを直接伝えたい」
というものだった

その質問に
今答えてくれるというのだ

ううん
わかった……伝える

もしかしたら私にも
まだチャンスがあるかも知れない
そんな淡い期待を胸に
私は彼の答えを待った

しかし彼の口から出てきたのは
私の恋心を完膚なきまでに
打ち砕くものだった

好きな子はいます





どんな子が
聞きたい？

……聞きたくない

俺の
好きな子はね……

**聞きたくないって
言ってるでしょっ!!**

たとえどんな答えが返ってきても
後悔はしない
そう心に誓っていた

しかし櫻井君の口から
その言葉を聞いた途端
私は教室中に響き渡るほどの大声で
彼の話を遮ってしまった



よく考えれば当たり前のことだ
人は誰だって恋をする

私が櫻井君に恋をしているのと同じように
彼もまた誰かに恋をしているのは当然のことだ

ただその相手が
自分ではないという
それだけの事……

心のどこかでは分かっていた
私みたいな女を
好きになってくれる人なんて
誰もいない事を

もう帰ろう……
帰ってベッドの中で
涙が枯れるほど泣けば
きっと諦めもつくだろう

そう思い立ち上がろうとした
その時だった——







俺の好きな子は
眼鏡を掛けてて頭良くて
いつも怒ってるけど笑ったら可愛くて
表情がコロコロ変わる
目の前で泣いてる子

櫻井君はそう言葉を続け
最後にこう付け加えてくれた

今恋に落ちました





その言葉を聞いた瞬間の喜びを
私はどう表現したらいいのだろうか？

ずっと好きだった人が
私の事を好きになったと
言ってくれたのだ

さつきまで私の心を覆っていた暗い感情は
嘘のように消え去り代わりに
例えようないほどの幸福感が満たされていた

とても言葉に言い表せない
まるで天にも昇るような気持ちとは
この事だった

そして私たちは
自然と引かれ合うように
口づけを交わした……



ずっと夢見ていた
好きな人との初めてのキス……

いつまでもずっとこうしていたい……
このまま時間が止まってしまえばいいのに……

ほんの一瞬唇が触れ合っただけで
鼓動が高まり胸が苦しくなる

しかし
決して嫌な苦しさではなかった

そんな切ない想いが
私の心を包み込んでいく





二度目のキスは
先ほどよりも刺激的だった

それが嬉しくて
つい自分からも舌を絡め合わせてしまった
ちよつと大胆だったかも……

互いの唾液を混ぜ合わせながら
舌同士を擦り合わせるように吸い合っていく

櫻井君の舌が
恐る恐るといった具合で
私の啞内へと入り込んでくる

そのぎこちない動きから
彼もこれが初めてのキスだと
容易に察しがついた

映画で見るような大人のキスに
私の頭は次第に
何も考えられなくなるほど蕩けていった







——どうして
こうなってしまったのだろうか？

いつの間にか私は
剥き出しにされた乳房を
櫻井君に弄ばれていた

キスで思考がおぼつかないほどに
蕩けてしまっていたせいで
なぜこんな事になっているのか
理解が追い付かなかった



それでも肌に触れられる快感だけは
明確に私の脳へと伝わってきた

彼の指が彼の唇が
私の身体の上を
隅々まで這い回る

その度に私の肉体は敏感に反応し
お腹の奥がぽかぽかと温かくなっていた





櫻井君はひとしきり
私の乳房を味わうと
意を決したような表情で
切実な思いを口に出した

俺委員長にもつと触りたい……
委員長の中に入りたい！

告白したその日に
一線を越えてしまうなんて……

頭ではそう分かっているけれど
こんな真剣な眼差し
彼を拒絶するなんて
私には到底できなかった……







櫻井君に下着を脱がされ
机の上に座らされると
促されるまま大きく脚を広げられた

まだ誰にも見せたことのない
私の大事な入り口が
彼の眼前に晒される

そこはすでにすっかりと濡れそぼり
彼を迎え入れる準備を完了させていた

あまりの恥ずかしさに
どうにかなってしまいそうだった





羞恥心に耐え切れず
彼の顔から背けるように視線を落とすと
私の目に異様な形をしたナニカが飛び込んできた

それが櫻井君の生殖器であると理解するのに
数秒の時間が必要だった



血管が浮き出るほど
赤黒く隆起したソレは
先端から透明な液体を滴らせながら
ピクピクと蠢いていた



委員長
挿れるよ……

櫻井君が
私に覆い被さるようにしてそう囁いた

私もそれに答えようと口を開いたが
言葉にならない吐息がただ漏れただけだった

わ私
初めてだから……

俺も初めてだから
大丈夫……

初めてを大好きな人に捧げられる喜びと
大好きな人の初めてを貰える嬉しさが
私の中に渦巻く不安を和らげていく





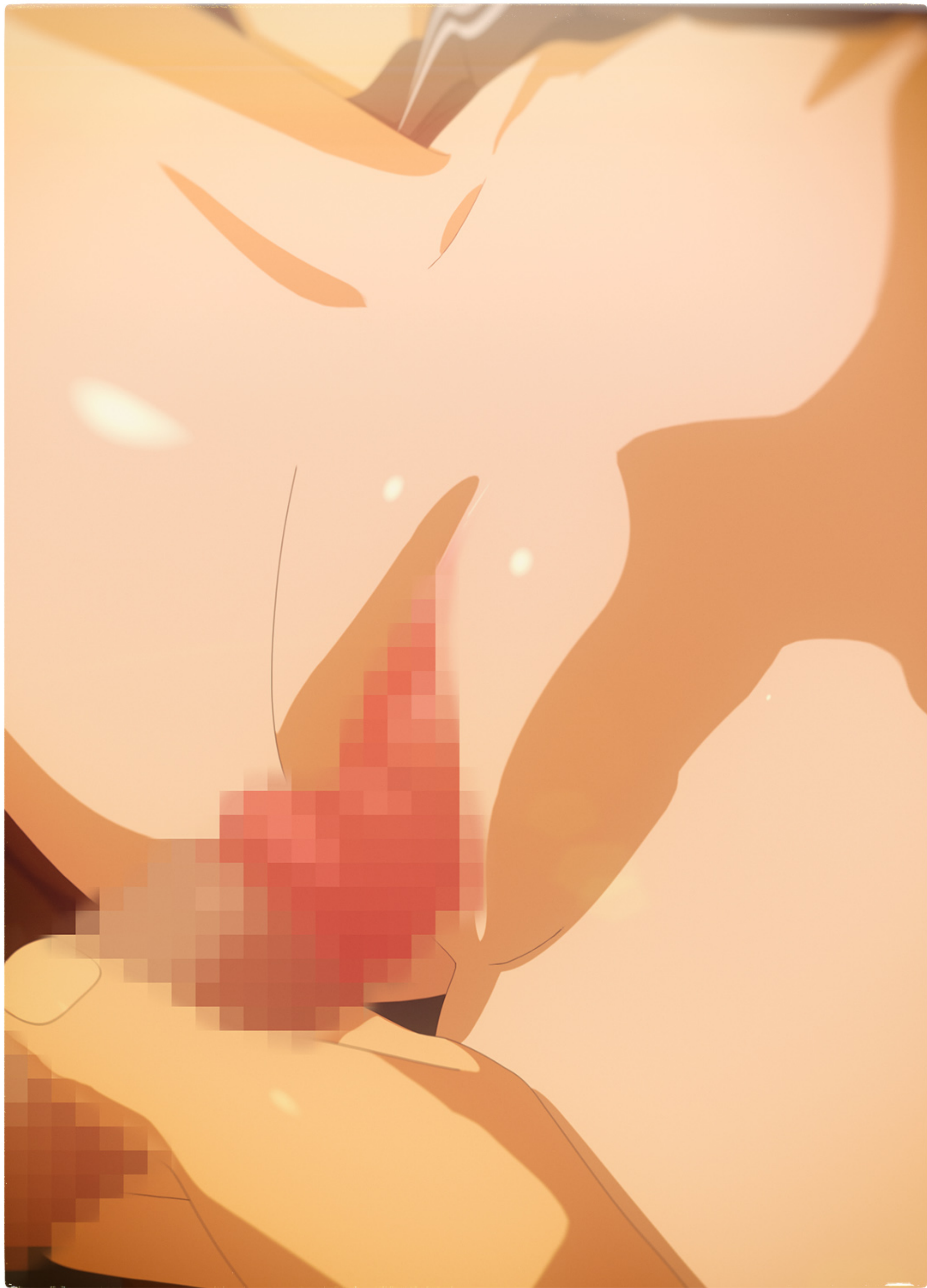
櫻井君は私の性器に
おちんちんを押し当てると
馴染ませるように
上下に擦り合わせた

やがて入り口を探り当てたのか
狙いを定めるかのように
先端を静止させた

……いくよ？

不安を紛らわせるように
彼の手を握りしめると
櫻井君は私を安心させるように
その手をぎゅつと
強く握り返してくれた

そして次の瞬間
膣口に押し当てられていたおちんちんが
ゆっくりと前進を開始した……





何かプツリと千切れる感覚と共に
強烈な痛みが襲い掛かってきた

あまりの激痛に
反射的に身体が仰け反ってしまう



委員長……
大丈夫？

だ大丈夫じゃない……
お願い 動くのちよっと待って

とてつもなく大きな塊が
体内に這入り込んでいるのが
ハッキリと分かった

無理やり広げられた穴が
ズキズキと痛みを発している
さつきまであればほど
気持ち良かったのが嘘のようだった



私は深呼吸を繰り返して
彼が一刻も早く行為に没頭できるような
身体を落ち着かせていった

……落ち着いた？

ふう〜何とか
いいわよ動いて

いいの？ 大丈夫？
無理しなくていいけど

櫻井君は
動きたいんでしょう？
少しぐらいなら
我慢できるから……

そそれじゃ……

櫻井君はそう言うとおもむろに腰を動かし始めた





揺れる視界耳に届く吐息
粘膜から感じられる想い人の温もり
子宮に響く心地良いリズム……

痛みと快楽が絡み合い混濁する意識の中
私はたった今起こっているこの現実
に
身体が震えるほど感動していた

ああ……
私は今セックスをしてるんだ

大好きな人と
繋がっているんだ……

櫻井君のおちんちんが
私の奥に突き挿れられる度に
幸福感が膨れ上がっていく





——ずっと優等生として生きてきた
教師や同級生の期待に応えるべく努力してきた

しかし私も一人の人間だ
性欲だってある

櫻井君に抱かれるのを想像して
自分を慰めたことも
一度や二度ではなかった

その夢にまで見ていた願いが
実際に叶っているのだ

嬉しさと喜びが
全身に広がり
痛みが快感へと
塗り替えられていく

労わるような櫻井君の
優しいピストンのおかげもあって
私の肉体は快樂の坩堝へと
沈んでいった





……委員長
俺の事本気で好き？

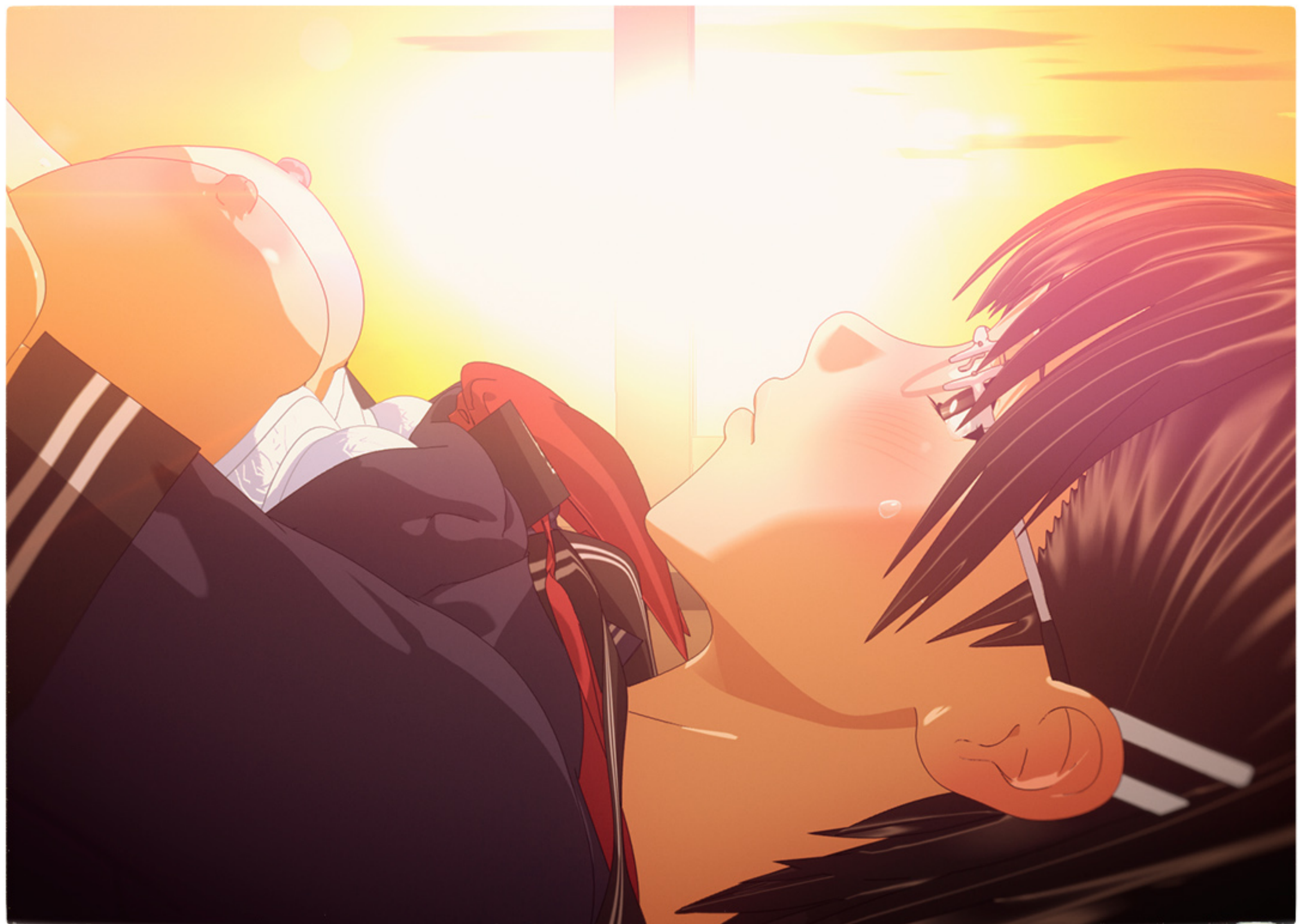
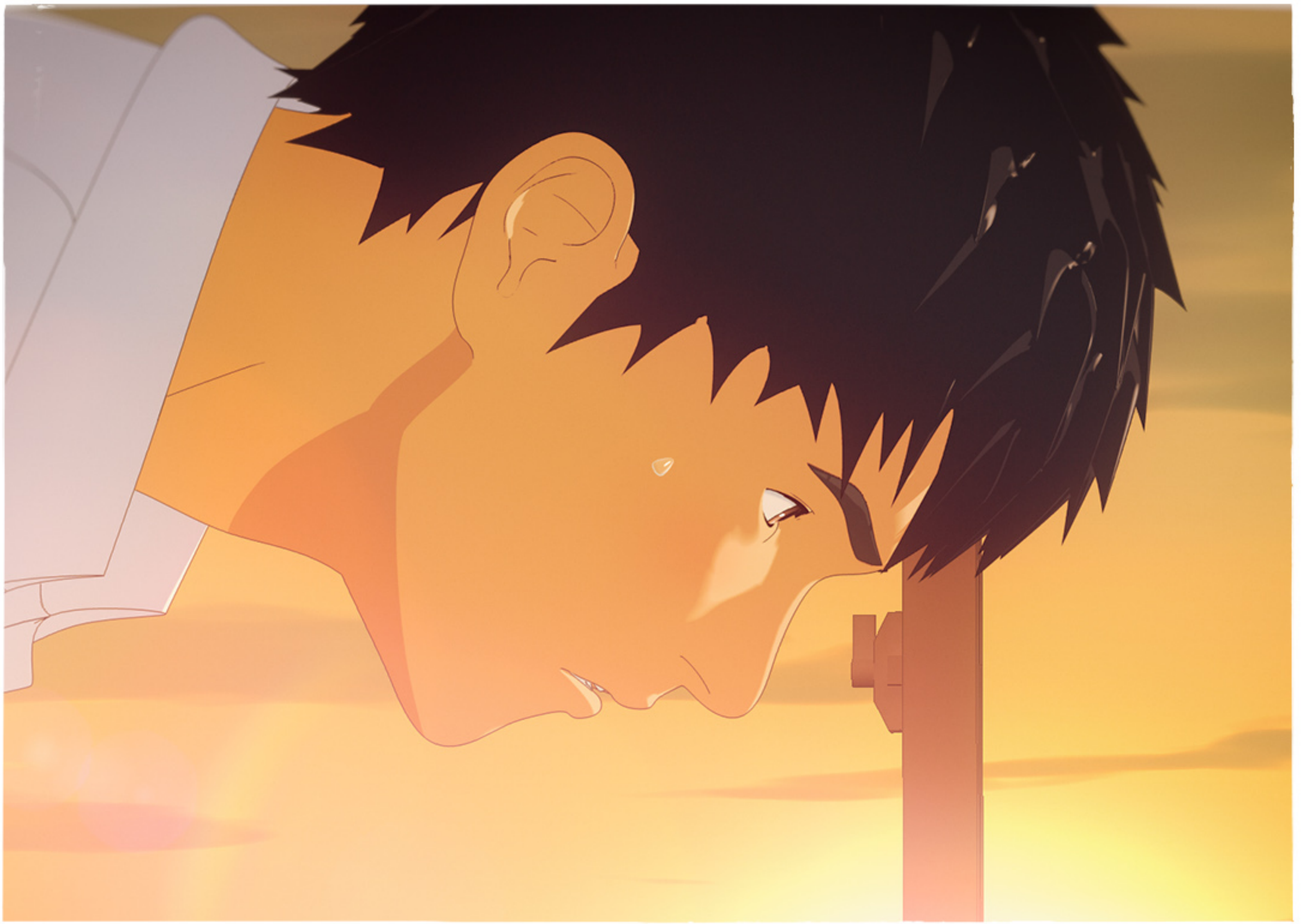
ええ？
どうしたの突然……

そういえば委員長の口から
ちゃんと聞いてなかったなって思っ……



確かに手紙には好きと書いたけれど
まだ自分の口から直接伝えてはいなかった

今さら隠す必要も
恥ずかしがる事もない
私は櫻井君に対する想いを
そのまま声に出して彼に伝えた



もちろん好きよ……
好き♡大好き♡
私は櫻井君が大好き……

自分でも驚くくらい素直に口に出ることが出来た
そして実際に言葉にしてみてもより実感した
私は本当に櫻井君のことが好きなのだ

俺も好きだよ
委員長

櫻井君の答えに
自然と頬が緩む

互いに好意を伝え合うだけで
どうしてこんなにも
幸せな気持ちになれるのだろう

そして彼は
こう続けた

……俺の子供
妊娠してくれる？



へえええええく!?

嫌?

い嫌って訳じゃないけど……
そんな急に言われても

勿論こうして避妊具なしで
性行為をしている時点で
妊娠の可能性があることは
十分承知していた

けれど
こう改まって言われると
そのことについて
考えざるを得なかった

だってホラ私たちまだ学生だし!
そりゃいつかは欲しいなって思うけど……
やだ何言ってるの私……



委員長……
俺このまま中で出すから

櫻井君はそう宣言すると
さらに激しく腰を打ち付け始めた

それは完全に
膣内射精をする為だけの動きだった

欲望に抗うことなく
ただ純粹に本能だけに従って
精液を私に注ぎ込もうとしている

駄目駄目っ！
絶対中で出しちゃダメッ！！

委員長もし本気で嫌だったら
今すぐ俺の体蹴り飛ばして！！







もしこのまま膣内で射精されたら
本当に妊娠してしまうかも知れない

それを防ぐには
櫻井君の言う通り
彼の身体を蹴って
引き剥がすしか方法がないだろう

けれど
一生懸命に腰を振っている彼を見ると
そうするには些か抵抗があった

せつかく私の身体で
気持ち良くなってくれているのだから
最後の瞬間まで中にいてほしかった



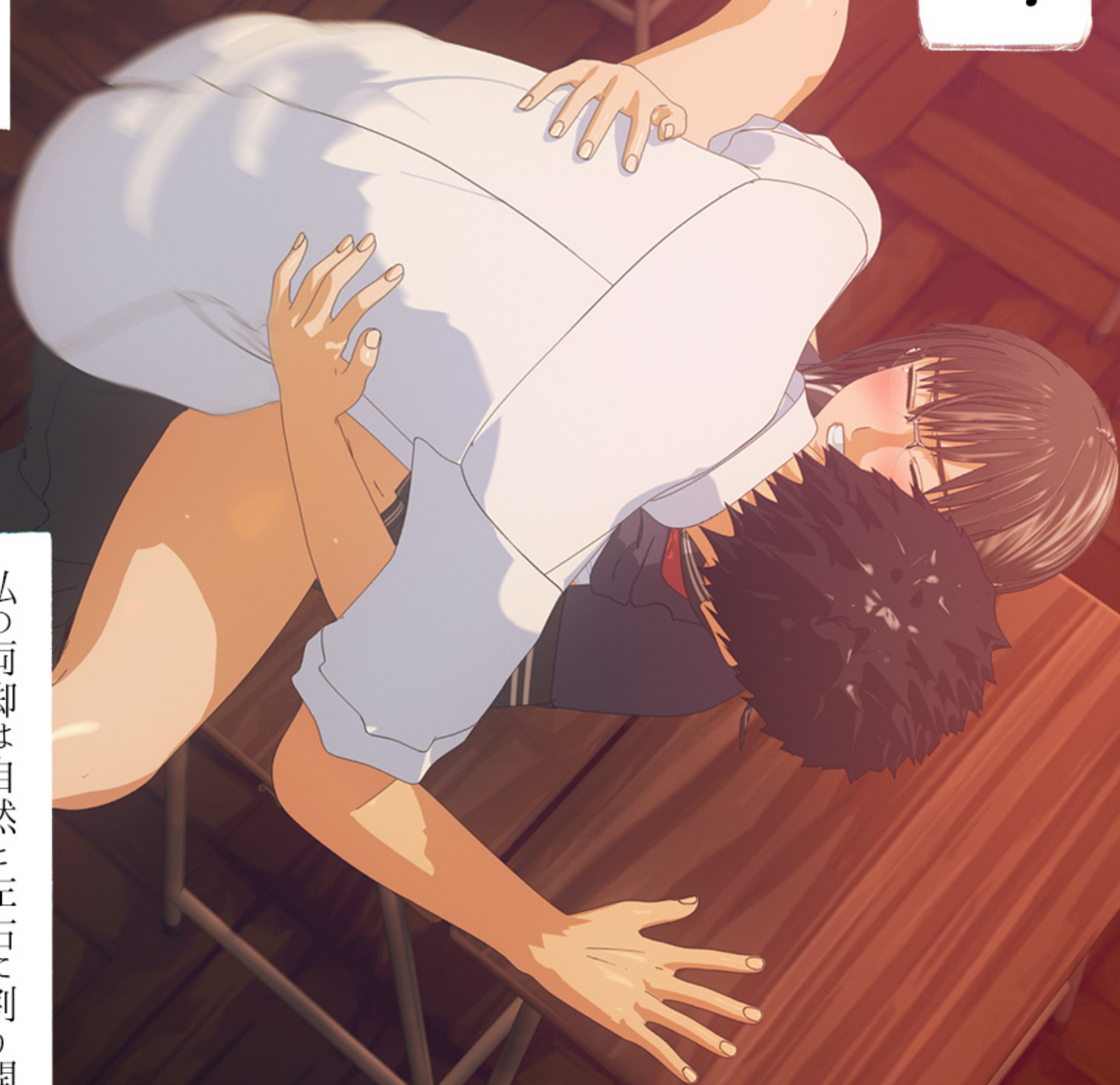
もつと脚広げて委員長……っ！
奥で出すよっ！！

ダメ……っ
精子出しちゃダメ……っ！

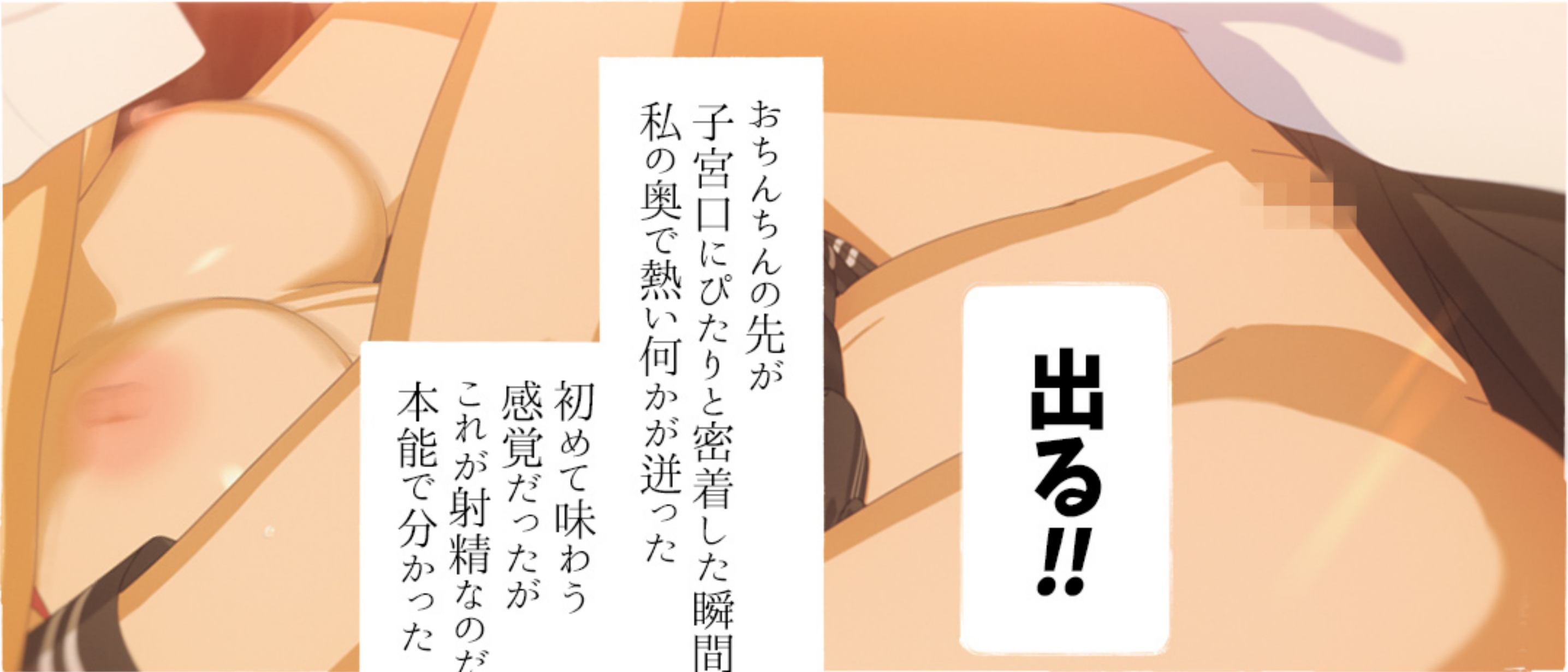
わずかに残った理性を総動員し
必死の懇願するが
彼の耳に届くことはなかった

いやもはや自分の身体にすら
届いてはいなかった

私の両脚は自然と左右に割り開かれ
まるで自ら子宮を差し出すかのように
その入り口を大きく広げていたのだから……







出る!!

おちんちんの先が
子宮口にぴたりと密着した瞬間
私の奥で熱い何かが迸った

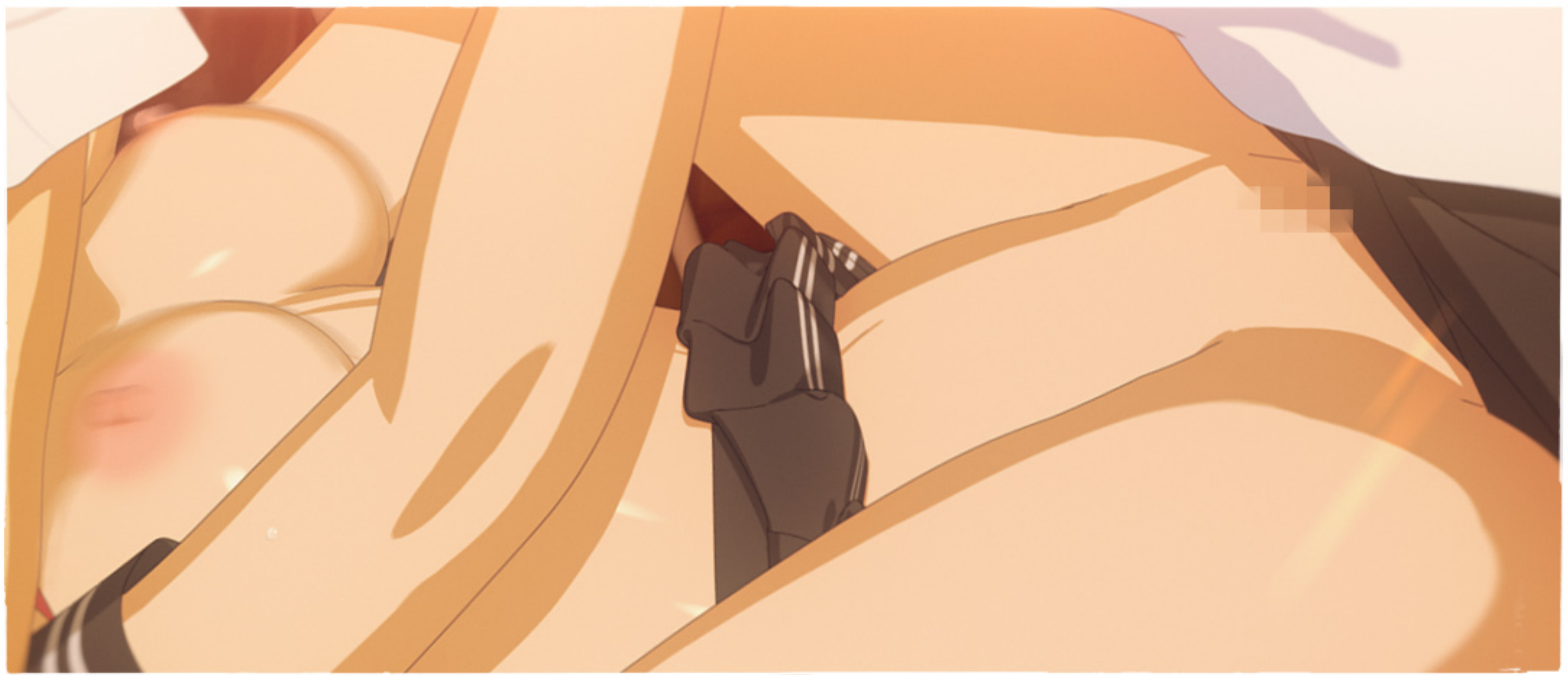
初めて味わう
感覚だったが
これが射精なのだと
本能で分かった



おちんちんが跳ねるように
何度も脈打ち
子宮に向かって執拗に
精液を浴びせ掛けてくる

身体中が
小刻みに痙攣し
手足の先が
ピンと硬直する

破瓜の痛みなどとうに消え去り
途方もない快感が
私の全身を包み込んでいった



ありがと委員長……
膣内でイクの許してくれて……

許してないわよ
バカ……

なんとかさう口にするも
私の膣はおちんちんを締め付けたまま
一向に離す気配が無かった

最後の一滴まで搾り取ろうと
射精の律動に合わせ
細かく収縮を繰り返している

櫻井君は
そんな私の膣を愉しむかのように
ゆっくりと腰を揺すりながら
吐精を続けていった







長い射精を終え
私の膣からおちんちんが抜き出されると
粘り気のある白濁した体液が
奥からドロリと溢れ出てきた

これが櫻井君の精液……

実際に目の当たりにして
ようやく私は膣内射精をされたのだと
実感することができた

しかし不思議と
妊娠に対する恐怖はなかった
むしろ私の心を占めていたのは
喜びと満足感だった

彼が私の膣内で射精してくれたことが
私を妊娠させようとしてくれたことが
嬉しくてたまらなかった……



委員長
俺もつと委員長の中に出したい……

もうっ
櫻井君つて
本当に自分勝手……

そうは言いつつも
私の中に拒否するという
選択肢は無かった

もつと櫻井君に抱かれたい
私の身体でもつと彼を
気持ち良くさせてあげたい

私の心はそんな想いで
一杯だったのだから……



……委員長
気持ち良かった？

うん
こんなに気持ち良いとは思わなかった……

一体どれぐらい時間が経っただろう
陽はすっかりと沈み
辺りは夜の闇に包まれていた

あれから私たちは
発情した動物のように
深く交わり続けた

膣内だけに留まらず
喉の奥にも精液を注がれ
全身で彼のすべてを受け入れた

櫻井君が後ろから私を優しく抱き締めてくれる
それだけで幸せが私の心を満たしていった
彼の愛情が温もりを通してハッキリと伝わってくる

私の初めての人が櫻井君で
本当に良かったと
心の底からそう思えた……





……あ
また大きくなってきた

ええ？

……あと一回だけだからね？

櫻井君は私に
もう一度キスをする
と下から突き上げるように
再び腰を動かし始めた……

ありがと委員長

ゴメン委員長……
もう一回いい？
委員長の身体
エロ過ぎて全然治まらない……

→ Next Chapter

